



災害・防災をテーマとした展示と大学地理教育（特集 東日本大震災と防災(3)）

菊地， 真

(Citation)

兵庫地理, 60:19-28

(Issue Date)

2015

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003889>



災害・防災をテーマとした展示と大学地理教育

菊地 真

1. はじめに

2014 年秋、神戸大学地理学教室（人文学研究科・文学部）では「阪神・淡路大震災および歴史地震から学ぶ災害・災厄」という統一テーマを掲げて地理学の各種授業を展開した。この一環として 11 月に「歴史地震（貞観地震）に学ぶ津波の実態」と題した企画展示を開催した。本稿では博物館展示と連動させた大学地理教育の試みについて報告を行い、若干の議論をする。

2. 問題意識

2014 年は翌年 1 月の阪神・淡路大震災 20 年を目前に、兵庫県や神戸市内でたびたび地震や震災に関するイベントが開催された。神戸大学でも地域連携センターほかで、災害関連のシンポジウム等が開かれた。震災 20 年を契機に、改めて地元神戸の震災以降の変遷をたどり、地理的観点から地域を見つめ直し、学生と共に震災への思いを新たにしたいと考えた。

今一つの理由は、災害を巡る地理学への反省からである。災害は地理学の主要な研究テーマの一つであるが、その研究成果は過去、十分に活かされなかった面がある。兵庫県南部地震が発生する以前、関西で地震は起こらないという風聞もあったが、実際には 1596 年の慶長伏見地震をはじめ、京阪神地域でしばしば地震が発生してきたのは研究者間では周知の事実であった。

また 2011 年に東北地方太平洋沖地震が起こる前、産業技術総合研究所（以下、産総研と略）の調査により、869 年の貞観地震において仙台平野一帯で海岸線から 3~4 キロ内陸まで津波が遡上した事、800 年程度の間隔で津波を伴う大地震が宮城県沖で繰り返されてきた事が、2010 年までに分かってきていた。再来間隔を既に経過し、防災対策が急がれるなか地震が発生し、東日本大震災をもたらした。地震予知が不可能とは言え、上述の意味で 2011 年の地震は

想定外では決して無く、地震防災への反省を私たち地理学に携わる者に強く促す結果となった。

しかるに現在、四国太平洋沖の南海トラフで予測される南海地震の発生が、ここ 30 年以内に 70%とされている。私たちが今現在暮らす関西でも、地震や津波による大規模災害が近い将来、確実に起こると考えられる。過去の地震に今こそ学び、一人ひとりが災害への備えをすべきとの思いから、冒頭のようなテーマを掲げ、歴史地震を軸としたワークショップを実施した。

3. ワークショップの経緯と方法の概要

当初考えたのは、実際の災害現場や資料などの巡検であった。神戸大学文学部地理学専修では地理学実習Ⅱにおいて、野外巡検を主体に教育を行っている。

現地に関しては、阪神・淡路大震災を経験した神戸では対象は数多くある。災害に係る資料については、折よく神戸市埋蔵文化財センターにて「大地に刻まれた災害史」(2014 年 10 月 18 日~12 月 7 日)が開催予定であり、この見学を組み込んだ¹⁾。同時に、貞観地震の津波堆積物の地質剥ぎ取り標本が利用可能なのを知り、活用を考えた。

貞観地震の地質標本とは、産総研が仙台平野の調査で地表面下の沖積層からジオスライサーで採取し、作成した剥ぎ取り標本である。サンプルから剥ぎ取って展示あるいは教育教材として整えられている。1 つが学校等での教材用に貸出可能とされており、この資料を地理学教室で借用したものである²⁾。

地理学教室の事業として、上記資料の利用を地理学実習等に組み込むことを担当教員間で確認した。ただ地理学専修の所属学生は比較的人数が少なく、特に貴重な地質標本を借用するのであるなら、より多くの学生や教職員に見てもらう機会を設けるべきではないかとの意見が出た。そこで全体を考え直し、最終的な事業の位置づけを次のようにした。

地理学教室で大学院人文学研究科、文学部で開講している授業、ならびに全学共通科目授業を、可能な限り本事業に関連付け、資料活用の機会を広げた。

“阪神・淡路大震災および歴史地震から学ぶ災害・災厄”という統一テーマを設定し、講義や実習、演習において、歴史地震と震災を関連付けながら災害について広く学ぶ方針とした。実習では野外巡検と地質標本の観察を行い、座学で災害事象を紹介し、演習で発表と議論を重ねた。

地質標本の利用については、多くの方が見学する機会を確保するため、固定会場での資料公開と十分な期間の確保を目指した。授業の度に資料を出し、移動させるのは、資料保存の観点からも危険を伴う。幸い、人文学研究科・文学部棟の多目的室が空いていたため会場として押さえ、神戸大学の学生・教職員等の幅広い見学を予測し、実質1週間の公開期間を確保した。

これら活動を博物館活動として理解すると、前者はワークショップ、後者は企画展示会となる。そこで名称を、ワークショップ+展示会「歴史地震（貞観地震）に学ぶ津波の実態」と付けた。括弧で貞観地震と明記したのは、展示会の主体となる展示資料が上記地質標本であったからである。

4. 展示会およびワークショップの内容と特色

（1）展示会

当初は地質標本1点しか展示資料が無かったが、大学附属図書館の協力を得て災害関係の図書類を用意した。また山口誓子記念館から、阪神・淡路大震災で被災した山口誓子旧邸の写真をお借りしたほか、地域連携センター、海事博物館、大学文書史料室をはじめとした学内の関係機関・各位のご厚意で、最終的に計80点の展示資料を準備することが出来た。

会場は大きく2部構成とし、前半は産総研より借用した仙台平野の地質標本を中心に展示し、地質標本の理解を深めて頂くため「歴史地震と津波」「貞観地震：古代の大災害」「歴史地震を探る」の3項目に分け、解説パネルと関連図書類をあわせて展示した。

「歴史地震と津波」は展示全体の導入であり、歴

史地震を学ぶ意義、地震や津波の仕組みについてまとめた。「貞観地震：古代の大災害」では、宮城県沖で平安時代に発生し、大津波をもたらしたと伝えられる貞観地震について、2011年の地震発生前から進められてきた研究成果から、改めて貞観地震とは何かを考えた。「歴史地震を探る」は、産総研の活動などを紹介し、過去の地震痕跡についての調査研究がいわば総合科学として各分野から取り組まれていることや、歴史地震研究の重要性を示した。

後半は学会によくあるポスターセッション形式で、学生の調査・学習成果を発表した。ただ会場の都合で、壁に大判ポスターを掲出できなかったため、前半と仕様を統一し、簡易ではあるがパネルを作成して、さまざまな過去の災害事例についての展示をした。

後半も3項目に分け、まず冒頭の「阪神・淡路大震災から東日本大震災」で、地元神戸で起きた阪神・淡路大震災から、中越地震・中越沖地震、東日本大震災と、社会的に大きな注目を集めた地震をめぐる地理的状況を整理した。

そして「歴史地震・災害の諸相」で、近年までの歴史地震や洪水のうち、京阪神域の事例を幾つか紹介した。「災害と文化財」では、文化財（地域歴史資料）も被災してきた現実に向け、文化財の災害からの救出・再生といった活動に焦点を当て、災害と文化財の関わりを考えた。

最後に「地域とつながる」と題して、阪神・淡路大震災を契機に展開してきた神戸大学の地域連携活動を広く紹介した。また展示会場中央には平机を設置し、災害について書かれた新書を展示した。展示した図書類は、殆どが附属図書館の一般図書であるため、見学者の方が自由にページをめくり、手に取って読んで頂けるようにした³⁾。

（2）ワークショップ

博物館でワークショップと言うと、体験学習や講座などを連想されると思うが、本事業では地理教育の一環としてワークショップを実施しており、授業関連の活動がこれに相当する。すなわち展示見学と解説、講義、野外巡検、ポスターセッションの演習である。

展示の見学は、地理学演習Ⅰ・地理学演習Ⅱ・景観文化財学・地域歴史遺産保全活用論・人文学基礎地理学で実施し、講義時間を利用して展示室で地質標本の説明等をおこなった。参加者は合計延べ76名である。また文化財学（副：博物館資料論）と共通教育の教養原論地理学でも見学を実施したが、対象学生数が両者計159名と多数なため、講義で数回、地震や歴史地震をテーマに取り上げ、展示内容について貞観地震を中心に解説したうえで、各自個別に見学するようレポート課題を課した。

文化財学は「災害事象に関わる諸資料を博物館資料として扱い、収蔵・活用する場合の方法や課題」について、教養原論地理学は「地震や津波といった災害に対する意見」を述べることにした。後者の方がかなり大まかなレポートテーマであるが、この教養原論地理学は共通教育のため文学部以外の1年生がほとんどで、地理学や地学の予備知識や興味度合いも様々なため、一般的な問いに留めた。

展示見学から発展させた巡検は、地理学実習Ⅱと景観文化財学でそれぞれ実施した⁴⁾。景観文化財学では12月に2回にわたり、神戸市の旧居留地地区をはじめ、海岸周辺の景観文化財と災害痕跡を見て歩いた。また年明けの1月に、神戸大学内の登録有形文化財の建築物群と震災文庫、附属図書館開催の「つたえる・つながる～阪神・淡路大震災20年～」展を見学した⁵⁾。

さらに前述したポスターセッションについて、景観文化財学の授業における演習として学生と当初から取り組んだ。

景観文化財学の受講生は、あらかじめ教員が割り振ったテーマに沿って、各自で調べてレポートにまとめ、レポートを用紙1枚分に要約し、パネルとした。展示期間中に会場で受講生同士が発表（解説）を行い、質疑応答で議論し、互いに理解を深めた。

但し今回の発表準備は、後期が始まった10月から1か月弱と極めて短いのが問題であった。シラバスと初回ガイダンスで、ポスターセッションによる展示参加が授業構成に含まれることを周知した⁶⁾。本来は災害や歴史地震に関するテーマを列举し、受講生が好きなテーマを選択できるように考えていたが、

台風接近による休講措置もあって、最終的に教員が受講生にテーマを割り振る形となった。受講生は、11月の発表後、巡検と講義を踏まえて学期末にもう一度レポートを作成した。

景観文化財学の最終レポートはテーマを「景観文化財ないし文化財の保全（保存活用）・防災」とし、最初指定されたテーマから発展的に考察するのを求めた。2回のレポートの題名とその骨子を表に整理したが、ほぼ同じ対象を調べた学生がいる一方で、大きく内容が変わった学生もいるのが分かる（表1）。これは災害と文化財に関して、対象そのものではなく、保全、市民参加、町づくり、といった活動内容へ関心の重点が移ったためと理解される。学生が学習を通じて関心を広げ、テーマを自ら発展させた結果とも言えるが、逆に言えば指定テーマで当初縛られたせいとも受け取れ、準備期間が短期だった弊害の一つであろう。レポートは少し早目の提出とし、全15回の授業の最後の時間を使い、レポートの返却と講評を行った。

5. 展示の成果と課題

産総研の地質標本は小中高の教室で利用しやすい形態を意図して製作されている。木箱にセットされアクリル蓋が付され、サイズや重量が非常にコンパクトで持ち運びがしやすく、使い勝手の良さと格段の利点があった。当初、講義室での利用も考えてこのタイプとしたが、必ずしも展示用ではないので、より幅の広い標本を探せば良かったとの悔いは残った。それでも地質標本には貞観と2011年の津波堆積物が明瞭に読み取れ、見学者が両者を対比しながら食い入るように見る姿が印象に残った。

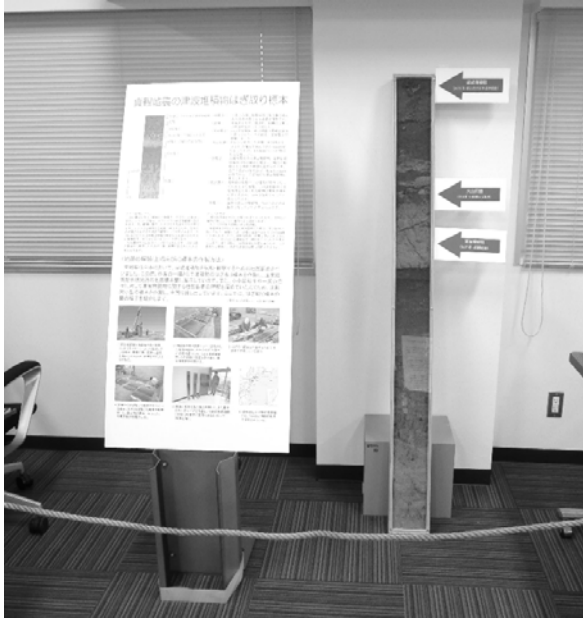


図1 地質剥ぎ取り標本の展示状況

私たちの地理学教室は文学部に属するため、地質標本を普段見る機会は少ない。実物の地質標本から学生が受けたインパクトは強く、アンケートでは「実感として津波・地震について考えることができた」、「はぎとり標本により、歴史地震に対する理解が一層深まった」、「防災の意識も強まった」といった感想が寄せられた。

一方で地質断面を見慣れてないせいか、分かりにくさも残ったようである。細長い標本の横に矢印で貞観の津波堆積物など主要なものを示し、横に標本作成方法および各地層の説明をパネルで示したが、「標本のビジュアル性が生かし切れていなかった」、「標本自体にもっと説明を加えて欲しい」、「もっと間近で見たい」といった意見があった。アクリルの蓋付きなので、顔を近づけても支障はないのだが、今回は直立状態を維持したため、安全上、手前に結界を設置した（図1）。

展示内容も貞観地震・津波のほか、2011年の東日本大震災や、歴史地震、洪水、文化財、コミュニティという様々なテーマを取り上げており、幅広い内容を紹介した点は見学者に好評であった。「最近の東日本大震災についても触れられていたので、歴史地震よりも身近に感じる事ができた」、「多角的な面で震災を考えることができた」後半のパネル展が特

に興味深く、……改めて災害からの復興について考えさせられた」、「展示と並べて、参考図書などが置かれているのは理解の手助けになりました」、などである。

課題の一つは会場である。博物館のような展示専用の部屋ではなく、展示壁面や展示ケースがおよそ確保できなかったため、受付係員を常駐させて万全を期したものの、資料保全に若干不安が残った。文学部棟内に会場を指し示すサインを何か所か設置したが、アンケートで場所が分かりにくい、図書館が会場であった方が良かったと言う指摘も複数あった。広報全体としても、周知が直前となり、しかも教員の担当授業や関係者への周知が中心であった。学内教職員や一般への案内を从一开始計画に入れるべきであった。

もう一つは準備期間である。本事業はそもそも、2014年の夏季に着想したもので、秋季に地質標本の借用に留まらず、展示まで発展させたのが失敗であった。実は同様に授業で展示制作を行うという例が同じ2014年度後期に開講されている。

「日本史演習」という演習の授業は、シラバスに「阪神・淡路大震災についての歴史研究および展示について、実践的な演習を行う。10月から12月にかけて調査、研究を附属図書館震災文庫等で行い、震災20年の展示を行う」、とある。担当は奥村 弘氏である。

この授業の趣旨は、地理学教室のそれとほぼ同じと言え、学生が主体となって震災20年の神戸を見つめ、考えながら展示を構築するのが特徴である。成果は、前述した附属図書館開催の「つたえる・つながる」展の第2期展示において、「記憶から歴史へ～阪神・淡路大震災を知らない世代の取り組み～」と題して展示・公表された（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター教員・学生グループ,2015）⁸⁾。

こちらの展示会と比べると、今回の私たちの展示準備期間は、いかにも短い。ワークショップ全体として考えると、展示会はワークショップの一部であり、更にそこから考察を深める足掛かりとして展示会が位置している。従って2014年10月から1月ま

でに及んだ事業全体としては上手く出来たが、展示会自体はもっと時間的余裕を持って進めるのが好ましいと言えよう。

1 か月に満たない中でレポート作成や会場準備等にあたった学生の負担は大きく、改善を期したい。

6. 大学地理教育としてのワークショップの意義

(1) 展示活動と大学地理教育

展示上の課題もあったが、それでも大学地理教育として、一定の成果があったと考えている。

そもそも博物館と地理学の結びつきは、強いようで弱い。地域を展示等で認識する手段として地図やジオラマはよく使われてきたが、地域博物館が各地に定着してきた現在においても、学芸員として活動する地理学研究者は歴史、考古、民俗の専門家に比べれば少ない(目代ほか,2010)⁹⁾。博物館の活動は近年、従来の資料収集・保存・公開(展示)に留まらず、市民との双方向的な対話や利用を重視する傾向が強い。美術館や歴史資料館での体験プログラムの充実や、科学館等でのサイエンスコミュニケーションの活動の多様さが、それを物語っている。私たちの取り組みは、いわゆる展示と、野外巡検(博物館的に言えば体験教室・見学会)を、教育活動にどう連携させるかという一例である¹⁰⁾。

大学における地理学教育は、高等学校までと違って学習指導要領等に規定されている訳では無く、地理学をどのように教えるかは、各大学や教員個人により大きく異なる。そのため“地理教育”と言えば小中高における教育方法の開発がほとんどであり、大学地理教育では、巡検の実施例や、人文地理学や自然地理学の開講例を個別事例として報告する例が散見される¹¹⁾。防災教育に限っても同様であり、大学の地理学で災害や防災についてどう教育展開するかはむしろ課題が多いと言えよう¹²⁾。

地理教育と博物館展示についても、博物館施設の利活用、野外体験学習など、いずれをとっても、いわゆる学校教育との連携が主体である。大学博物館が珍しくなくなってきた昨今でも、大学博物館の連携事業と言えば、地元の小中学校や地域住民が対象の中心と見られる¹³⁾。

以上の点が重要なのは論を待たず、神戸大学においても同様の思考が求められる。一方で大学内において、学術資源やその研究成果を公開する展示活動等の博物館活動を、大学教育とどう結び付け、利用可能かという視点も無視しえないと思われる。

このように考えた時、歴史地震をテーマとした展示活動を、地理教育のワークショップの連環の一部に位置づけ、試行した私たちの取り組みについて、展示活動と大学地理教育の両面から効果を検証し、次に繋げる必要があると考える。

以下、実物資料の利用、展示(パネル)構築、ワークショップの演習、学生への教育効果の順に検討していく。

(2) 巡検・実物資料

ワークショップのうち、野外巡検は地理学で常に行っている。景観文化財学は文化財学に関わる講義主体の授業として開講されており、地理学専修生以外の他専修、他学部の学生も毎回受講者が多い。そのように多様な学生に対し、巡検を実施し現場で思考する機会を提供し、学生同士が意見交換するのを促したという面はまず重要である。

景観文化財学では、文化財の中でも地理的な“景観”を扱っているため、巡検はむしろ欠かせない要素であり、野外で景観に目を向け、実際の事物に触れて考える習慣を学生が身につけるよう更に配慮していきたい。

実物に接するという点では、地質標本の利用は成功であったと言える。地形や地質はスケールが大きいため巡検で地形等をイメージしてもらうには工夫がいる。地質断面は露頭で観察可能だが、神戸大学のある神戸市街地は都市化が進行して露頭観察は容易ではない。ましてや平野を構成する沖積層は地下に埋没しており、平野の成り立ちを地質から理解していく際に、剥ぎ取り標本は格好の素材である。

産総研の資料は仙台平野特有の地質条件を示してはいるが、津波堆積物と、堆積物の年代特定につながったテフラ層、そして表層付近の2011年津波堆積物が明瞭に累積している。歴史地理学的な地震・津波の周期性を一目で見られるので、歴史地理や防災教育の素材として有効性が高いと言える。

(3) ポスター・パネル作成

ポスターにして展示発表するという経験は皆初めてであった。最初のレポートでは、そのままポスターに仕上げる前提で、A4用紙1枚以内に図版を含め、文章を収めるよう指示した。それでも当初数ページに及んだレポートも少なくなく、会場配布用資料として残した上で、1人1枚のパネルとなるよう調整した。

レポートをはじめからポスター発表する前提で執筆するため、どう書けば他者に伝わるのかという書き方の訓練になった、という感想を後で述べた発表者もいた。演習のレジюме作成もほぼ同様とは言え、“地理学”や“文化財”に関する予備知識の無い不特定多数の見学者を想定して用意する点は、レジюмеと展示解説文の大きな違いである。

今回は時間的制約から、ポスターのデザインは教員側で整え、ポスターをパネルにし展示する作業も全ての受講生が担った訳ではないが、作成し展示するまでを含めた表現力の一定の訓練になったと認められる。

(4) 演習形式

私たちが通常行っている地理学演習では、学生が自ら調べたテーマについて発表し、出席者全員で議論をするが、発表は大抵毎回、1人から数人である。地理学という範疇での議論とは言え、様々なテーマが提出され、それがまた魅力でもある。2014年度の景観文化財学でポスターセッションに参加した学生は10名である。そして“災害と文化財”という地理学のなかでもやや限定された、共通するテーマについて取り組んだ。テーマを展示にあわせ、絞れたのは良い点であった。



図2 ポスター(パネル)展示状況及び発表演習の様子

会場の約半分に並んだ各自のパネル(レポート)を全員で目にしながら説明を聴き、議論するという方式は、通常の演習以上に対象が可視化されている点で大きく異なる。パネルや標本、図書などの形で関連資料にその場でアクセスし、視覚的イメージを結び合わせながら考える機会は、新たな発想を生むきっかけになったと言える。

実際、学生の中には他の展示資料やパネルを見比べた上で説明し、意見を述べる者もいた。例えば南海地震の周期性から、地震は歴史的に繰り返起こるため、過去の地震の記憶を継承し備える重要性を指摘したある発表者は、同じ安政地震で津波の被害を受けた大阪と神戸の浸水域等に違いがある点を見出し、その要因を新たな疑問として、会場での議論の際に提出していた。最終レポートを見ると、津波の記念碑の取材から、さらに津波と地形の関係へと考察が発展している(表1; E)。

以上のように、展示会場で実施した発表と議論の体験は、演習として学生に確かに刺激を与えており、ディスカッションの能力はもとより、問題解決能力や批判的思考力の伸長にもなったと考えている。

なお最終のレポートの内容も、レポートに各自付加してもらった要旨とキーワードを取りまとめ、最終回の授業で配布した。出席者にはレポートの内容紹介と感想を述べてもらい、教員が災害と文化財というテーマで各レポートの内容をつなぎ合わせ、復興の象徴、市民参加、まちづくり、といった文化財防災で着目すべき要素を整理することで、まとめの講義とした。これはポスターセッションの時と同様

に、他者の意見を一覧し、全体を眺めることで、災害・防災への意識を深め、定着させたいとの意図による。

(5) 学生相互の教育的補完

本節ではここまで、ワークショップ参加者の内、景観文化財学の受講生（展示作成者）を主に述べてきた。

最後に、授業の一環で展示見学した他講義の受講生、つまり見学者への効果について触れておく。

学生から寄せられたアンケートは、大きく地質標本、展示全般、そしてポスターセッションの3つに言及されていた。例えば“文化財学(博物館資料論)”では資料論的特性に注意して見学し、レポートを提出するよう求めたため、アンケートも自ずから展示手法にまで言及する例が散見された。「標本以外にも関連する実物の資料などがもっとあれば面白かった」、「標本が展示の目玉であるなら、もっと目立つように展示空間の中央に置くなど工夫が必要」、といった意見は端的である。

私たちにとって予想外であったのは、ポスターセッションへの言及が多かった点である。講義で展示会の説明をした際、学生のポスター展示がある旨を細かく説明しなかったとは言え、見学者である学生たちは、展示の中でも、同じ学生が作成した展示パネルに大いに関心を寄せていた。

アンケートから以下、列举する。

- ・学生のレポートの展示に驚きました
- ・親近感がわき見やすかった
- ・ポスター展示は、普段知ることのない他学部生の学習内容を知る良い機会であり、刺激を受けた
- ・学生の研究の熱心さに感銘を受けた
- ・学部2・3年生の方々が積極的に意見発信しているのが素晴らしいと思った
- ・勉強する励みとなった
- ・先輩方のパネルを見てすごいと思った
- ・同じ学生の興味をひく展示だと思った

特に教養原論地理学の授業は学部1年生が大半なため、上級生である2・3年生が専門的学習を深めているのを目の当たりにし、学習意欲を刺激されて

いるのが分かる。

展示作成者と見学者、双方の学生同士が展示を通じて多面的に学習意欲を向上させており、当初予測に無かった面でも大いに教育効果が認められた点は特記しておきたい¹⁴⁾。

7. おわりに

本稿では、神戸大学地理学教室による展示会「歴史地震（貞観地震）に学ぶ津波の実態」および連携した地理教育について内容を紹介した。また大学と言う場で実施する地理教育の中でも、講義以外の演習や実習系の展開の仕方として、博物館活動と同期して実施した本事業の課題を整理し、大学地理教育としてのワークショップの意義を検討した。

実物資料を展示物等として用いるのは博物館の特徴である。展示や野外巡検を大学博物館と地理学教室で協力して企画・実施する有効性は高いと考える。

学生が授業を通じて学んだ成果は、各授業時のゼミ発表で受講者間に共有されるが、レポートは教員と学生個人間のやり取りとなる。その点、ポスターを作って展示することでレポートにおける一つの学習到達点が目に見える形となり、受講者間で共有できるのは、新たな教育効果が期待できる。今回はポスターセッションとして、受講生同士でポスターを前にした発表と意見交換を、授業時に展示会場で行った。プレゼンテーションの能力は地理学に限らず社会一般で求められる技能であり、演習の手法として有意に働いたと考えている。

また展示作成者と見学者という、対照的な学生相互の教育効果も見逃せない。ワークショップに主体的に取り組んだ学生はもちろんであるが、展示を見学しレポートをまとめる、というありがちな課題だけを見ても、手法によっては災害や地理学だけでなく、教育・学習そのものに少なくない刺激を学生に与えられた。これは大学・博物館・地理教育という3者のバランスの結果もたらされた好例で、一度限りに終わらないよう、この成果を活かしていきたい。

本稿では、兵庫地理学協会特別例会で先に発表した展示報告を中心としたため、博物館活動と地理教育という、事業の根幹についての検討がやや不足す

る結果となった。アンケートや授業で提出されたレポートの分析を進めて再度議論したいと考えており、ご叱正ご批判をお願い申し上げます。

注

1)先史時代からの火山、洪水、地震、火災などを対象とし、昭和13年の阪神大水害の豊富な資料や、旧居留地の安政津波堆積物、宮城県仙台市の弥生時代の津波堆積物なども展示されるなど、幅広い内容を取り扱っていた（神戸市教育委員会,2014）。

2)貞観津波堆積物の地質標本の作製経緯や地層の詳細について、『地質ニュース』に記載がある（澤井,2014）。この標本は各種教育用に1週間程度レンタル可能。

<https://www.gsj.jp/publications/gcn/gcn3-02.html>

3)実際に中身を見られる点は好評であったが、盗難防止のため閲覧の可否を明示的にしなかったため、見学者の中には手に取っていいかわからず、「閲覧可」と書いておいて欲しいとの意見も寄せられた。

4)以下、ワークショップは景観文化財の授業について詳述する。地理学実習Ⅱ、および地理学演習Ⅰの展開については、藤田の論考を参照されたい。なお巡検で主に見学したのは、みなと元町駅（旧第一銀行外壁）、海岸ビルディング、海岸通り、メリケンパーク、バイパスの被災橋脚、真珠会館、阪神大水害の碑、生田神社、15番館、神戸市危機管理センター（安政津波堆積物検出地点）。

5)神戸大学附属図書館は毎年、所蔵資料展を開催している。今回は震災20年を踏まえ、同図書館に設置されている、阪神・淡路大震災関係の図書類等を収集・公開している“震災文庫”の資料を中心に、阪神・淡路大震災の発生から避難生活、復興の歩み、神戸大学や震災文庫の活動経緯ほか、20年前の震災を資料から振り返り、次に伝える展示であった。展示資料を入れ替え、2期（1期が2014年10月17日～11月16日、2期が12月24日～2015年1月29日）開催されたが、どちらも基本構成は同じである。私たち地理学教室の展示が、貞観地震を主に歴史地震・災害を取り扱ったのと対照的で、当初から双方の企画をすり合わせ

ていた訳ではないが、結果的に異なるテーマの展示となり、互いに相乗効果もあったと考えている。

6)シラバスは以下で確認できる。学生には授業時のガイダンス、学内学修システムを利用し周知徹底に努めた。

https://syllabus.kobe-u.ac.jp/kobe_syllabus/2014/01/data/2014_2L212.html

7) 同じ建物の1階に丁度、大学附属図書館の文学部分館に当たる人文科学図書館がある。

8)神戸大学の学生にとっても、直接の被災経験者は今や少なく、震災の記憶は歴史事象となりつつある。日頃見慣れている神戸の街が、地震でどんな被害を受け、20年でどう変わって来たのかを、学生の世代の目線で捉えて紹介する展示で、防災教育として、また震災の経験や記憶をどう継承するかという意味でも興味深い。特に担当した学生の率直な感想が展示に付けられていたのが印象に残った。

9)地理学と博物館について、2010年に『地理』55巻10号で特集が組まれた。宮本真二氏は博物館と地理学の関係がイメージしにくい、との指摘をしている（宮本,2010:pp.12-13）。目代邦康氏は、博物館における地理学の役割として、異分野の研究者や研究成果を結び付け、取りまとめ、市民に情報発信するという、サイエンスコミュニケーションを挙げている。エコミュージアムの流れとも合わせ、今後進展する部分であり、地理学もどう関わっていくか、考察を深める必要があろう。なお地理学と博物館に関しては過去、橋本（1994）、浜田（1994）、浜田ほか（2000）、坂本（1997）、宮本（1997）、福田（1997）などの議論がある。

10)大学博物館における教育普及活動も何度か議論がなされている（守重,2004）。実践も各地で蓄積があり、大学博物館と地理学という論点も今後求められよう。

11)大学地理教育については、長坂（1995）のように地理教育のあり方全体を論じた例もあるが、類例は少ない。大学改革がこの10年来大きく進んでおり、人文地理・自然地理といった枠組みを越えて地理学の大学での教育を考えていく必要があろう。なお2014年度に、兵庫地理学協会特別例

会・人文地理学会地理教育研究部会「自然地理学の役割」が開催され、大学における自然地理学教育の実践と課題が議論されている。

12)防災の地理教育は小中高の事例から広く検討、開発されている（植村ほか、2009；岩田・山脇編,2013）。大学全体の危機管理対策として、防災教育やハザードマップの作成がなされているが、大学の地理教育で災害・防災に取り組んだ事例紹介や論説は管見の限り殆どない。川口ほか（2013）は東日本大震災の被災地を対象にした一例である。

13)神戸大学も地域連携推進室を設置しており、大学院人文学研究科の地域連携センターでは、歴史系教員を中心に、市民と協力し合った地域歴史資料の保存・活用の活動を幅広く行っている（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター,2015）。

14) このアンケートにおけるポスター展示への反響は、展示会終了後すぐ、展示を作成した受講生に授業時に紹介し、伝えた。展示作成する経験も大事であるが、展示した反応を聞くのも大変重要だからである。

15) ワークショップ+展示会「歴史地震（貞観地震）に学ぶ津波の実態」開催記録を以下に記載する。

期間：2014年11月7日(金)～17日(月)

(※土日は閉室、実質7日間)

会場：神戸大学大学院人文学研究科C棟多目的室

来場者：総計 242名 (35名 ※1日平均)

実施関連授業：地理学演習、景観文化財学など延べ8講義

主催：神戸大学大学院人文学研究科・文学部

地理学教室(藤田裕嗣, 原口 剛, 菊地 真)

展示制作：地理学演習Ⅰ・景観文化財学受講生(10名)、地理学教室専攻生(5名)

協力機関：産業技術総合研究所／神戸大学人文学研究科地域連携センター、附属図書館、山口誓子記念館、海事博物館、文書史料室(順不同)

本稿の骨子は2014年12月14日開催の兵庫地理学協会特別例会において発表した。展示会の報告は下記、地理学教室HPにもpdfを掲載。

2015年度は今回の反省を踏まえ、1年間かけて授

業と連動させながら展示を構築する計画である。神戸大学海事博物館で夏以降開催される企画展及び学内巡回展にあわせ、神戸の景観文化財と災害をテーマにパネル展を開催したい。概要は追って地理学教室HPで公開。

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/geography/index.html>

参考文献

岩田 貢・山脇正資編, 地理教材委員会 (2013) :『防災教育のすすめ—災害事例から学ぶ』古今書院。

植村善博ほか (2009) : 特集 地震災害に立ち向かう地理教育, 地理 54-2, pp.42-48.

川口幸大・関 美菜子・伊藤照手 (2013) : 東日本大震災に関連したフィールドワークを行うこと／それを指導すること—「文化人類学実習」の授業を事例に, 文化人類学 78-1, pp.111-126.

神戸市教育委員会編 (2014) :『大地に刻まれた災害史』神戸市教育委員会。

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター (2015) :『歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業(13)』神戸大学大学院人文学研究科。

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター教員・学生グループ (2015) : 記憶から歴史へ—阪神・淡路大震災を知らない世代の取り組み, 海港都市研究 10, pp.93-106.

坂本育男 (1997) : 人文地理学と地域歴史博物館, 立命館地理 9, pp.67-75.

澤井祐紀 (2014) : 津波堆積物のほぎ取り標本の作製, 地質ニュース 3-2, pp.53-59.

長坂政信 (1995) : 大学における地理教育改善への一試案—教職課程の地理学を例として, 新地理 43-3, pp.1-10.

橋本直子 (1994) : 博物館と地理学, 歴史手帖 22-1, pp.13-17.

浜田弘明 (1994) : 近郊都市の博物館における地理的課題—現代的視点に立った博物館活動に向けて, 法政地理 22, pp.95-109.

浜田弘明ほか (2000) : 特集 地域における地理学の役割, 法政地理 31, pp.1-42.

福田珠己 (1997) : 地域を展示するー地理学における地域博物館論の展開, 人文地理 49-5, pp.24-46.

宮本真二 (1997) : 博物館における自然地理学の役割, 立命館地理 9, pp.77-81.

宮本真二 (2010) : 博物館と地理学, 地理 55-10, pp.12-19.

目代邦康ほか (2010) : 特集 地理学と博物館, 地

理 55-10, pp.10-54.

守重信郎, 2004 : 大学博物館における教育普及活動の研究ー展示と展示解説, 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 5, pp.209-220.

(きくち・まこと 神戸大学大学院人文学研究科)

表 1 展示作成者 (学生) のワークショップ前後における調査研究対象の変化

作成者	展示パネルのテーマと概要	最終レポートのテーマと概要
A	阪神・淡路大震災の概要と文化財の被害	阪神・淡路大震災での被災文化財とその後
	文化財レスキューで知られる、被災資料・文化財の救援活動について。	北野異人館を特に取り上げ、復興と景観復元、観光地化の抱える課題について検討。
B	東日本大震災：コミュニティと文化財保全	東日本大震災における歴史資料保全活動
	仮設住宅とコミュニティ意識の変化を阪神・淡路大震災と比較。また地域コミュニティの要素である文化財保全活動も概観。	文化財保全活動の内、宮城資料ネットの取り組みを紹介し、デジタル化、ボランティア活動などの課題を整理。
C	元町・中華街の被災状況	景観文化財ないし文化財の保全・防災
	元町および中華街の震災からの復興の特徴について。	神戸市の景観文化財保護の流れをたどり、今後のあり方として、地域資産への住民理解と文化財を含めた防災町づくりに言及。
D	安政地震による神戸の被害	安政地震が影響を及ぼしたと考えられる神戸の文化財の詳細と未曾有の震災で被災した文化財の役割
	安政南海地震の痕跡として、旧居留地地区検出の津波堆積物と、生田神社の鳥居を取り上げる。	前回レポートの調査を補足した上で、2011 年震災で被災した文化財の、地域コミュニティとの関わり合いについて言及。
E	大坂を襲った南海津波	大阪市・神戸市における津波痕跡と防災
	安政南海地震時の津波被害に関わる石碑を取材し、地域による対応の差を指摘。	津波の記録である石碑や堆積物の保全と防災に果たす役割を、実際の津波被害範囲と地形の関係を考慮しながら考察。
F	阪神大水害とボランティア	阪神大水害と神社・寺院への被害
	阪神大水害における救援の一特徴であるボランティア活動を取り上げる。	阪神大水害による水害対策やボランティア活動の進展といった特徴を整理し、特に寺社の被害状況についてまとめた。
G	北淡震災記念公園における野島断層の保全と活用	景観保存とまちづくり
	兵庫県南部地震で出現した断層変位を地元で保存し、活用してきた取り組みを紹介。	震災資料や文化財の保存は、広く地域単位でのまちづくりと文化の集積である街の保存という問題である。近代化や復興で画一的に町を更新せず、地域の文化的価値の考慮が重要とした。
H	旧居留地地区の被害と現状：15 番館	神戸市における歴史的建造物と 15 番館からみる大震災
	震災の被害と復興の象徴的存在となった旧居留地の異人館、15 番館の来歴と意義を紹介。	なぜ 15 番館は復興されたのか。人命のための防災対策の中、歴史的文化的価値を守るため行われるべき日頃の対応について検討。
I	六角堂の持つ文化財的価値	六角堂の持つ 2 つの文化財的価値とその保全
	北茨城にある岡倉天心が建てた六角堂の登録記念物としての価値と、津波で流失後、復元された建物のシンボリックな価値に言及。	六角堂には、当初の芸術的価値と、被災後付加された震災の象徴としての価値の 2 つがある。文化財の保存では事前準備と地元意識の喚起が重要である。
J	茨城・桜川市真壁伝統的建造物群保存地区の町並み保存および震災復興	文化財防災の市民参加について
	伝建としての真壁地区の価値とあゆみ、被災した伝建の町並みの復旧過程を取り上げる。	文化財防災で京都市で取り組まれている市民参加について調査し、地域コミュニティの役割を指摘した。

※サブタイトルは省略した。上段が表題、下段が概要を示す。表左から右へ、展示作成時と授業最終時でどう変化したかが読み取れる。

